

この木何の木、気になる木？

シノロ先史時代 前編

北区支部 池本吉一

まずは、なぜ、このような表題の歴史を書くことになったのか、このことからお話いたしましょう。札幌市医師会の各支部の先生方も、支部ごとに会報を作られていることと思いますが、もう2年前から、当北区支部の会報の編集長より、篠路の木を、北区支部かわらばんの表紙絵に載せたいとの御提案いただいておりました。その木が、当院のそばのお寺の木だということで、去年より、近くを通るたびに、何度かチェックしていたのですが、この木かなと思いを馳せてはいましたが、全くそれらしい木は見当たりませんでした。それもそのはず、私は、樹齢8,000年ぐらいの屋久島に自生しているような縄文杉を想像していたからです。しかし、そんな8,000年前の縄文時代の篠路付近は、気温は今より暖かく、海水面は3～4mも高かったといわれ、沖積平野がまだ形成されず、古石狩湾が岩見沢の方まで、入り込んでいた時代で、篠路付近は遠浅の海か沼や低湿地帯と考えられていました。後述するイチヨウの木は、日本国内では、最古のもので、仙台市の「苦竹の大銀杏」が、樹齢1200年、幹周り8m、高さ30

mがせいぜいあるぐらいです。なんでも、そのイチヨウの木は、飛鳥時代の、聖武天皇（701～756年）の乳母が、植えたものとされているとのことで、そもそもイチヨウは約1億5,000年前の中生代ジュラ紀に大いに栄え、大氷河時代に中国で生き残っていて、それが、遣隋使や渡来人によって、日本に持ち込まれなければ生えない「生きた化石」といわれているそうです。そのイチヨウが、明治5年に開山したといわれる篠路山龍雲寺の門前に植えられ、札幌市北区で唯一の記念保護樹木として指定されている。そのイチヨウは、高さ10m、幹径58cm、樹齢100年以上で、明治初め、篠路開拓者の心の拠りどころとして、鋤柄松太郎さんが植えたものとされるそう。すると、篠路の歴史は140年ぐらいということになります。著者はかつて、平成16年の正月に、札医通信No.437号の新春随筆で、札幌市医師会100年の歴史を書いたことがあり、歴女ならぬ、歴男としては、再び、この歴史物語の資料を集め書かねばならない気持ちにかられていました。いずれにしても、北区支部かわらばんの北区点描という欄に、この木の謂れを記載しなければならず、篠路の開拓の歴史そのものを調べなければなら



龍雲寺門前に聳え立つ樹齢100年以上と謂われる大銀杏



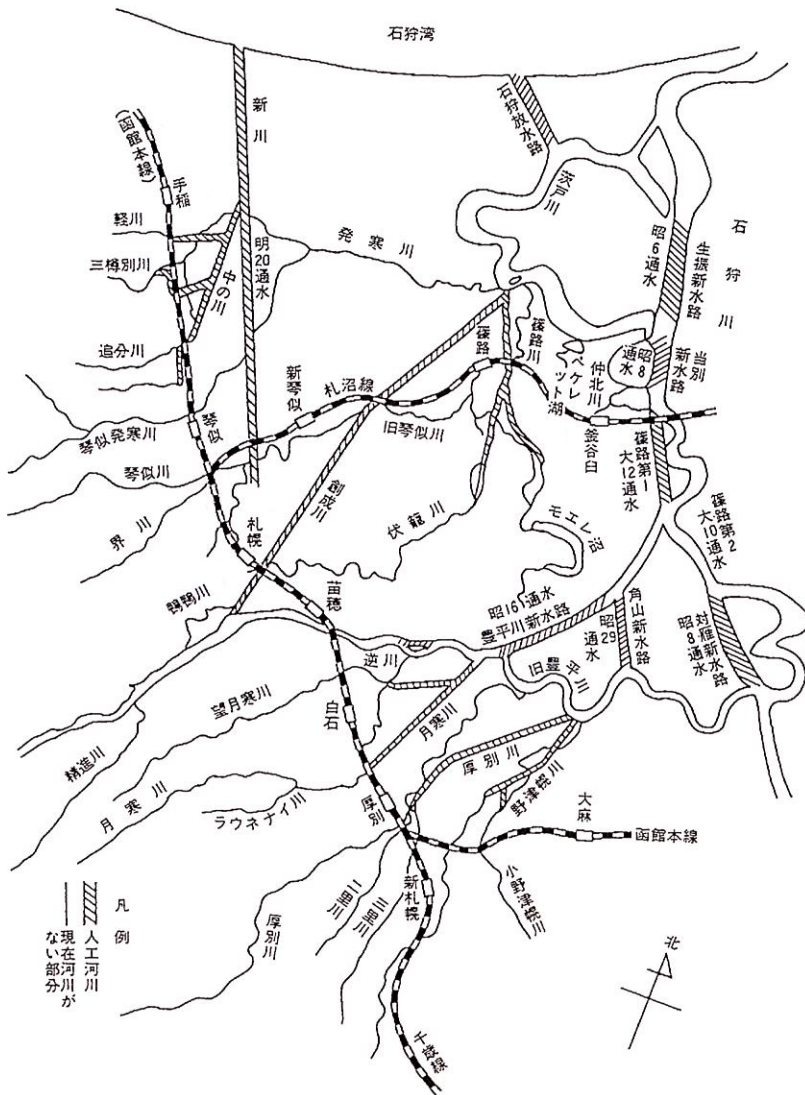
いことに変わらないのである。確か、今から10年ぐらい前に、この龍雲寺の関係者から、「シノロ百四十年のあゆみ」という1,000ページを超える本を1冊頂いたことがあったので、その時、もしかしたら将来、篠路の歴史を書く機会が来るかもしれないと思い、すぐに電話をして、もう2～3冊お譲り頂けないかと頼んだことがありましたが、非売品といわれ断られた経緯がありました。その後、その本を待合室に飾っていたところ、患者より所望され、泣く泣く差し上げて以来、私はすっかり、そのことを忘れていました。これも何かの縁と思い、篠路コミュニティーセンターの郷土資料館まで行き、再び、この本と再会を果たしました。小学生以来、本など借りたことはありませんでしたが、本貸出券まで作成し、他に4～5冊の関連する本と資料をお借りしました。さらに、書店に行き、北海道の歴史本、アイヌ歴史本など5冊程を購入し、私なりの一つの物語考証をしました。

北海道の歴史は古く、縄文時代は6～7,000年もの長い間続き、その間に豊平川扇状地の形成が進み、札幌駅付近で人が住めるぐらいになり弥生時代に入る。4、5世紀に入ると、石狩低地帯、江別付近で後北式という土器が作られ、北は千島、サハリン、南は東北の宮城県付近まで広がりを見せた。後に、東北地方へと北進して勢力を広げようとしていた大和朝廷と緊張関係をもたらし、斉明4（658）年、阿倍比羅夫が水軍を率いて、アキタ、ヌシロ二郡の蝦夷を討ったという記録が残っている。今から1,200～1,300年前の平安より鎌倉時代に入ると、今では街並みに埋もれていますが、北区のほぼ中央に蛇行して流れていた川があった。サクシュコトニ川、旧琴似川という、今の植物園付近で湧き出す水を源として、北大構内から新川、麻生を経て、篠路で、伏籠川へと合流していた。まさに、この合流地点に龍雲寺のイチョウが将来樹植され、この地点を、「鍋を浸しておく所」という意味のアイヌ語の<スウオロ>といったことから篠路の語源が始まっているという。その旧琴似川の面影は、今も北大構内に

残されていて、明治の中ごろに行われた遺跡の発掘調査では、この川に沿って800もの住居跡が見つかっている。この頃を北海道では、擦文時代と呼んでいる。石器は使わなくなり、ナイフなどの鉄器が使い始められ、この川を上ってくるサケなどを捕る狩猟採集の他に農耕が本格化してきた。住居は、正方形の壁に粘土や、石で組んだ竪穴式住居になっていた。鎌倉時代末期頃になると、この擦文文化が消滅し、代わって、アイヌ文化の時代になり、家は、竪穴式から平地式となり、本州から鉄なべが普及し、炉で煮炊きされるようになった。以上は、遺跡調査の研究に基づくもので、一部は、歴史書日本書紀の東北、北海道に関する記録から推測されたものである。

札幌の開拓は北区から始まっている。つまり、石狩浜を中心に、石狩川河口に向けて、大河の流れは、福移から西へ、拓北、茨戸、花畔と大きく蛇行して、石狩湾に注いでいたが、この流域に沿って、江戸時代、元禄のあたりより北海道（当時は、蝦夷地と呼ばれていた）に住むアイヌと本州との間で、主に舟で活発に交易が行われていた。本州からは、酒、米、衣類、鉄器、北海道からは、サケなどの海産物、熊、鹿などの皮が交換されていた。この石狩河口より上流へ上ると、まず右手に発寒川があり、琴似発寒方面に至りますし、次に出てくる伏籠川を遡上すると、篠路に至り、龍雲寺付近で旧琴似川と伏籠川に分かれ、旧琴似川を行くと、北大・植物園方面から円山公園方面に及んで、琴似方面に行き着く。一方、伏籠川を遡ると丘珠、元村、苗穂方面に至る。この石狩は、江戸時代末期になると、アメリカからペリー来船を皮切りに、鎖国政策をとる日本の周りに欧米各国の艦隊が、しばしば姿を現し、徳川幕府は、国を守るという観点より、蝦夷地行政を転換する必要性に迫られた。寛政11（1799）年、蝦夷地の直轄を始め、文化4（1807）年、幕臣・近藤重蔵や松浦武四郎らに蝦夷地の探索を試みさせた。この時、北方のロシアに相対するための本拠地の候補地の一つとして交通条件の良い、札幌の定山溪あたりをと、幕府に進言し、いよ

札幌の河川改修の様子



さっぽろ文庫24「札幌と水」による

いよ道都・札幌の建設に着手する方向性が出されたのであった。(平成26年6月記)

参考文献

- (1) さっぽろ文庫38、札幌の樹々、札幌市著、昭和61年9月発刊、札幌市教育委員会
- (2) シノロのはじめ、荒井金助・早山清太郎・龍雲寺、羽田信三著、平成10年6月発刊、

龍雲寺住職 丸山一立

- (3) シノロ-140年のあゆみ-、羽田信三著、平成15年6月発刊、篠路協賛会
- (4) アイヌの歴史-海と宝のノスド、瀬川拓郎著、平成19年11月発刊、講談社
- (5) 北海道の歴史がわかる本、桑原真人、川上淳著、平成24年11月発刊、亜瑠西社
(篠路整形外科)